博士論文要旨

パウル・クレーの一九一六―一九二三年の文字絵

――作品の構成、テクストの形式と内容を巡る考察――

野田由美意

パウル・クレーは一九一六年から一九二一年まで、十点の「文字絵」を制作した。その特徴とは、詩を挿入して画面全体が構成され、線によって形成された文字の間隙が着色されているということである。これまでのクレー研究で、全ての文字絵の詩がアジア・オリエントと関わっており、個々の作品がある種の連想によって重なり合う部分を持っているという点、あるいは文字絵における時間の表現を考慮して、これらの文字絵が体系的に論じられたことは無かった。本稿では、作品の構成、詩の形式と内容を分析しつつ、上記の問題に関わる歴史的背景を、クレーの書簡や日記、従来の研究では言及されていないクレーの読んだ多くの本や芸術雑誌のみならず、その交友関係等についての調査から明らかにする。

第一章では、文字絵の分析の前段階として、クレーと舞踊の関係を論じる。クレーが若い頃アジア・オリエントと接触した具体的な形跡が、一連の踊る人物線描画に最も明確に見られるからであり、また、その線描の手法が、根本的に文字絵の発案にも結び付くと考えるからである。ここではクレーの舞踊を主題とした第一次世界大戦勃発までの線描画の発展を、身体運動、風刺画、アジア・オリエントへの関心という点から考察する。

第二章では、一九一六年の文字絵を扱う。これらの文字絵の詩はハンス・ハイルマン訳の『中国の叙情詩』に依拠している。この本にクレーが初めて接触したのは一九一六年であると従来の研究では言われてきたが、クレーの蔵書を調査することにより、この本が一九〇九年に、当時のクレーの数少ない理解者の二人であったエリアスベルク夫妻から贈られたことが分かった。このことから第一次大戦前に遡って、一九一六年の文字絵制作に至るまでのクレーの東洋観に影響を与えた諸資料と人間関係の状況を分析する。

第三章では、一九一七年の文字絵《Emilie》について論じる。この作品の構成や詩の形式と内容については、従来の研究で十分に論じられたことが無い。パウル・クレー・センターの保管するこの作品のカラー写真を頼りに、これらの問題について検討する。作品の分析に当たって、この文字絵におけるナンセンス詩と、ドイプラーやヴァルデンとの交流から関心を持ったであろう未来派の詩やあるいはダダの詩を照らし合わせ、またクリスティアン・モルゲンシュテルンの詩の特徴を考察の対象とする。

第四章では、一九一八年の文字絵《かつて夜の灰色から浮かび上がった　色彩文字》を取り上げる。この作品は、これまで言及されることが多かったにもかかわらず、文字絵の詩の源泉の可能性について十分に制作状況を検証して論じられることが無かった。そこで本章では、この作品を一九一八年にクレーの父ハンス・クレーが自由訳し、クレー自身も一九一三年以来挿絵に取り組んでいた『詩篇』や、クレーが一九一六年に入手した『ギルガメシュ叙事詩』、

またクレーがこの年に挿絵を描いていたドイプラーの散文詩『銀の三日月と』と照らし合わせることにより、文字絵の詩の源泉の可能性について考察する。そこからクレーの制作の意図を解明する。

第五章では、一九二一年の文字絵を扱う。一九二一年の二つの文字絵は、父ハンス・クレーの自由訳『雅歌』に依拠している。従来の研究で、これらの作品をハンスの訳と照らし合わせて詳しく論じることはなされていない。そこでこの章では、ハンスの著作とその関連資料の調査を拠り所として、これら二点の文字絵の制作過程を追究し、また父子が共有したアジア・オリエント、言語・音楽領域についての知識や関心を明らかにする。それによって、この自由訳が一九二〇年代前半のクレーの芸術と造形理論に重要な示唆を与えたことを導き出す。

以上、各文字絵の構成と、詩の形式と内容との考察から、第一に次のことが明らかにされる。一九一六年から一九一八年の文字絵では、色彩は意味論的な基準で配置されていたが、一九二一年の文字絵になって、詩の強音節に当たる各母音に各色が規則的に結び付けられる。この色彩のダイナミズムと文字による線の生成過程が結合して、画面に時間的、音楽的性質が現れることになる。一九二〇年代以降、クレーの作品や造形論において音楽との取り組みが積極的に行われるようになるが――それは近年のクレー研究でもとりわけ注目されている領域である――この文字絵研究はその流れを理解するための一つの基盤となると考える。

また、クレーは第一次大戦以前からアジア・オリエントに政治的・芸術的関心を持ち、その関心は戦中から戦争直後にかけて、アジア・オリエントに関する多様な本を読むことによって頂点に達していることが明らかとなった。文字絵の制作はその豊富な読書体験に源を発し、中国、アナトリア、旧約聖書の世界が文字絵と結び付いている。これらの文字絵はそれぞれが一見無関係ではあるが、一九一六年と一九一八年の文字絵が一九一五年の《詩篇のための二つのビネット》を介して、また一九一八年と一九二一年の文字絵がハンス・クレーの自由訳を通じて関連性を持つようになる。さらに一九一七年と一九一八年の文字絵が「飛行」の主題を共有する。ただしそれぞれの作品におけるその主題の捉え方は異なっている。このように文字絵は、個々に独立した形式と内容を持ちながら、それぞれに重なり合あう部分を有している。文字絵において、クレーの想像力は自由に様々な時空を行き来するのである。

文字絵の制作期は、戦時中、クレーが新進気鋭の画家として認められていった時代に相当する。これらの現実が、文字絵の制作に影響してくることを本稿では指摘した。中国の詩による一九一六年の文字絵においては、長引く戦争に対する嘆きと、和平を求める切実な気持ちが反映されている。ただし、それは直ちにヴァルデンのクレーキャンペーン戦略に取り込められてしまう。戦争と一見乖離したお伽噺めいた作品が、まさに戦時下であるが故に売れ、結果的に戦争に恩恵をこうむってしまっているという現実は、一九一七年の文字絵においてクレー自身に向けられる笑いとなって表されている。だが、この作品で問題とされた「飛行」は、一九一八年の文字絵では、新しい世界への真剣な願いを込めた「飛行」へと変わっている。そして一九二〇年のツァーンのモノグラフを通じて、アジ

ア・オリエントはクレーにとってやはり芸術家としての社会的地位を確立するための一手段となる。だが、そこで展開する彼岸的な芸術家としてのクレー像は、むしろシュトゥットガルト美術学校の教授職を手に入れることの失敗を招く一因となり、その後の制作に関し論理的に説明することをクレーに課すことになるのである。だが、そのような背景からクレーの一九二〇年代の作品も整然とした構成主義的な作品に変わってしまうわけではなく、表現主義的な痕跡を残した作品が複線的に多く生み出されていく。そのような中で、一九二一年の文字絵において確認したように、アジア・オリエントは、一九二〇年代の絵画や造形論への新たな発想源になるのである。

この研究によって、クレーの作品の源泉が非常に豊かで多岐にわたっていること、また第一次大戦前からとりわけ戦中、戦争直後という困難な時代を、画家が一人の人間としてどのような考えを持って生き、それを作品に反映させたのかということが改めて浮き彫りにされたと考える。

*この博士論文は『パウル・クレーの文字絵』として二〇〇九年に株式会社アルテスパブリッシングから出版される。

Paul Klees Schriftbilder von 1916 bis 1921: Betrachtungen über die Zusammensetzung der Werke, die Textform und den Textinhalt Resümee der Dissertation

Yubii Noda

Paul Klee schuf von 1916 bis 1921 zehn „Schriftbilder", die man wie folgt charakterisieren kann: Gedichte füllen jeweils die gesamte Bildfläche aus und die Räume in oder zwischen den Buchstaben sind gefärbt. In der bisherigen Klee-Forschung wurden diese Schriftbilder noch nicht systematisch erörtert. Vor allem ihr Bezug zu Asien und dem Orient, die Verbindungen zwischen verschiedenen Schriftbildern, und die Zeit bzw. die Bewegung, die sie zum Ausdruck bringen, wurden bisher nicht näher erforscht. In der vorliegenden Arbeit werden die geschichtlichen Hintergründe dieser Probleme nicht nur anhand von Klees Briefen bzw. Tagebüchern und vielen von Klee gelesenen Büchern bzw. Zeitschriften analysiert, die in der bisherigen Forschung nicht berührt wurden, sondern auch anhand von Klees Freundschaften um diese Bücher bzw. Zeitschriften. Aus diesen Analysen ergibt sich zunächst Folgendes: Während die Farben in den Schriftbildern aus den Jahren 1916–1918 semantisch aufgestellt sind, werden bestimmte Farben in den Schriftbildern aus dem Jahr 1921 regelmäßig auf bestimmte Vokale bezogen. Indem die Dynamik der Farben sich mit dem Werden der Linien der Schrift verbindet, wird dem Bild ein zeitliches und musikalisches Charakteristikum gegeben. Die vorliegende Untersuchung könnte eine Grundlage zum Verständnis von Klees Beschäftigung mit Musik bilden. Zweitens ergibt sich, dass Klee schon vor dem Ersten Weltkrieg politisch und kulturell an Asien und dem Orient interessiert war, und dass dieses Interesse seinen Höhepunkt in der Zeit des Ersten Weltkriegs bis unmittelbar nach Kriegsende erreichte. In dieser Zeit las er verschiedene einschlägige Bücher, und aus dieser reichen Lektüreerfahrung entstand sein Schaffen der Schriftbilder: Besonders China, Anatolien und die Welt des Alten Testaments verbinden sich mit diesen Schriftbildern. Die vorliegende Forschung verdeutlicht, wie reichhaltig und verschiedenartig die Quellen von Klees Werken waren, mit welchen Gedanken der Künstler als Mensch vor und besonders während der Kriegszeit bzw. kurz nach Kriegsende lebte, und wie sich diese in den Werken spiegeln.